日中友好のしんぶん
日本と中国

2018｜06
2018年第2号
発行：岐阜県日本中国友好協会
500-8117岐阜県岐阜市南殿町2－10
TEL / FAX　058-240-0621

杉山幹夫会長を再任
役員改選、事業計画などを承認
2018年度定期総会

県日本中国友好協会の定期総会は5月19日、岐阜市橋本町の朝日大学病院西館で開かれ、杉山幹夫会長が再任され、新名誉会長に古田肇知事、副会長には柴橋正直岐阜市長と小川敏大垣市長が就任する役員改選案ほか、「ぎふ中国くるぶ」などの事業計画案などを原案通り承認した。

役員改選案などを原案通り承認した2018年度定期総会
＝岐阜市橋本町の朝日大学病院西館

本年度は任期（2年）満了に伴う役員改選の年。柴橋岐阜市長、小川大垣市長が新しく副会長に就任したため、副会長は再任の大友克之朝日大学学長、國島芳明高山市長、水野光二瑞浪市長の5人体制となった。

事業計画の主なものは、日中平和友好条約締結40周年、県と中国江西省との友好都市提携30周年を記念し、中国事情や文化・経済を学ぶ公開例会「ぎふ・中国くるぶ」を引き続き開催し、県の江西省友好代表団派遣事業参加などを盛り込んだ。

新役員は次の皆さん。

▽名誉会長　古田肇▽会長　杉山幹夫▽副会長　大友克之、柴橋正直、小川敏、國島芳明、水野光二▽顧問　星屋秀幸▽参与　村瀬恒治、中島岦▽理事長　土屋康夫▽事務局長・理事　田中孝典

日中の40年を語る
元外交官の市橋氏

定期総会後、本年度の第1回公開例会「ぎふ・中国くるぶ」が開かれ、元外交官で徳川美術館副館長の市橋康吉さんが「40年前の中国～国交正常化初期の思い出」と題し講演した。

市橋さんは1970年代のアジアの情勢、中国での語学研修体験を交え、日中平和友好条約締結の経緯などを語った。

（講演要旨は裏面に）

中国からの誘客に意欲
名誉会長の古田知事

定期総会から3日後の5月22日、杉山幹夫会長は県庁に古田肇知事を訪ね、懇談した。

杉山会長はまず名誉会長快諾へのお礼の後、「日中関係が好転する兆しが見えてきた。この機を生かし、当協会の基盤を確かなものにしたい。国際情勢に明るく経験豊富な知事の力をお借りしたい」と述べた。

これに対し、古田知事は「今秋の江西省での友好都市30年式典へ出掛ける。中国からもっとたくさんの人に岐阜県に来てもらいたい」と訪日客誘致に意欲を見せた。

◆中国くるぶ情報◆

【第2回講演会】
日時　7月28日（土）
午後1時30分～
講師　野村康弘氏（天野エンザイム株式会社常務取締役・生産本部長）
演題　「中国と天野～先々代から続く中国への想い」
会場　朝日大学病院西館ホール（岐阜市橋本町）

◆

【第3回講演会】
日時　10月27日（土）
午後1時30分～
講師　宮本雄二氏（元在中国日本特命全権大使）
演題　日中が二度と戦わないための原点（仮）
会場　朝日大学513教室（瑞穂市穂積）

◆

【第4回講演会】
（新春のつどい）
日時　平成31年2月2日（土）
午前11時～
講師　西川ちさとさん（フリーアナウンサー）
演題　上海から見た日本（仮）
会場　グランヴェール岐山（岐阜市柳ケ瀬通）

【市橋氏の講演要旨】

外務省に入省したのは１９７２年。９月29日に田中角栄首相が中国を訪れ、周恩来首相と日中共同声明に署名、日本と中国の国交が正常化した。中国政府は外国人に語学研修の門戸を開け、在外研修一期生（３人）に選ばれ、翌年夏に留学した。

正常化前まで中国語研修は台湾か香港で行われていた。日中政府間で留学生交換に合意。台湾で勉強していた１年上の２人もわれわれに合流した。ちなみに中国政府派遣の一期生は、現駐日中国大使の程永華さんら６人。高校を卒業したばかりだったが、みな優秀だった。

当時、日中航空協定締結前で直行便がなく、東京から空路香港へ行き、一泊。鉄道で深圳（せん）をまたぎ、広州でまた一泊したあと、空路北京に向かった。広州はとても暑く、夜遅くまで街灯のない暗い通りで大勢の人が涼んでいた。

北京では大学再開までホテルで、中国語の個人レッスン。小中学生の教科書を手に入れようと試みたが、やんわり断られた。10月に北京語言学院（現北京語言大学）でようやく授業が始まった。学生は外国人のみ。東欧社会主義国、西側からは英、仏、米、カナダ。日本はわれわれのほかに友好協会派遣の学生がいた。文化大革命の後遺症で校舎の窓ガラスは割れたまま。時折、宣伝隊が校内で政治活動を始め、教授たちは緊張していた。

外交官時代を振り返り講演する市橋康吉さん
＝朝日大学病院西館ホール

留学生宿舎に入り、食事は配給制。通貨は手垢で黒くなった人民元と外匯券（外国通貨に裏打ちされた）で、外国人は外匯券しか使えなかった。日本関係のニュースはラジオの短波放送を通じて知った。

一年の最後にグループ旅行で東北地方に行った。旧満州国時代の建物が残っており、日本人が来ているのを知って涙するお年寄りがいたが、戦争のつめ跡は至る所に残っていた。後に外務省外郭団体の国際問題研究所で旧日本軍の遺棄兵器を処理する仕事に携わったとき、当時を思い返した。

74年９月、北京大学文学部中国文学科へ。中国人学生に交じっての勉強で宿舎は一室２人。中国人と同室になったが、私が電熱器で日本の即席ラーメンを作る様子を羨ましそうに見ていた。中国人学生は試験ではなく、工場、人民公社などで推薦を得た、学歴より人望のある人たちだ。外国人の影響を受けないよう、当局の目が光っていた。『四人組』の時代で資本主義は悪と言われていたが中国人学生はイデオロギー派と現実派に分かれていた。

北京市内は国産乗用車（上海、紅旗）はわずか、自転車、バスの時代。国際電話はオペレーターに申し込みが必要だった。

２年間の中国留学を終え、米国の大学へ。帰国後、中国課に勤務し、日中平和友好条約の交渉に関わり、78年８月の同条約締結のときには、園田直外相に随行した。今年は40周年の節目の年。感慨深い。

中国は鄧小平の指導で改革開放に舵を切り、ＧＤＰ世界第２位の経済大国になった。一方で憲法を何度か改正しているが『中国共産党の指導』など国家体制の基本は維持。中国が『世界のモデル』にという勢いだが、世界との関わりの中で大きく変わらざるを得ない。中国の混乱を望む者は誰もいない。賢く変わって行ってほしい。

４月から県国際交流員を務める鄧俊玲さん

上海で日本語教師を長いこと務め、今春、県国際交流センターの交流員に就いた。１年の任期は短いが、中国にもっと親しみを感じてもらうため『懸け橋』になりたいと意欲的だ。

黄金週間前、金華山に登ったとき、初対面の女性ペアから飲料水を買ってもらった。「親切がうれしく、アイスクリームをお返しした」。

人生は出会いの連続。日本語教師になったのは、青年海外協力隊の日本語教師とめぐり会ったから。英語志望だったが、南昌大学日本語学科に配属。熱血授業に魅了され、後に続く日本人教師は学生のために日本語の本を日本から集め、学生の実家を訪ね歩いた。

◇◇この人◇◇

「彼らにあこがれ、彼らを手本にして日本語教師になった」

２年前、上海の大学教師訪問団の一員として英国を２週間訪ねた。帰国後、ネーティブな国へ、と在中国日本大使館が募る国際交流員の試験に挑戦、見事合格した。

「今年は江西省と岐阜県の友好都市提携30年。江西省をもっと知ってもらういい機会」

中国外交の舵取り役だった故周恩来総理に幼い頃からあこがれてきたという。『民間外交官』の役目が回ってきたといえる。

江西省撫州市出身。39歳